

京鹿子

平成二十
九年九月
二十一日
発行
毎月一回
一日発行

8月号

豊 田 都 峰

叡林集 その八



青 嵐 惣 構 なる 城 造 り

筋といふ並木にそへばつばめ反る

荷を揚げし船場はいまも薫風裡

堀底にまでネオン映え道頓忌

走り書くメモも梅雨入りの手触りに

あぢさゐのひぐれの雨となりみたり

夏帽子咲かせて森の午後となる
夏帽をひとつたよりに横切りけり
夏帽を深く渚の風となる
一寸の光陰いかにか墓
櫻桃忌片方といふ重さかな
ひなげしのゆらりと朝の風のみち
川風をため合歡咲けば陰ひらふ
折返す合歡の木陰の昨日今日



— 近 詠 —

鈴鹿 仁

月見草

影ひとつ慕ひしものに月見草

油売りまぼろしの途つばめ反る

蟻塚の山の鎮もる古戦場

— 追懐 — (その十二)

でで虫の渦のむかうの山動く

鳴神の水の重宝とんぼ来る

(大山崎
離宮八幡宮)

(大山崎
天王山)

[平成六年作]

[平成六年作]



— 近 詠 —

和田 照海

夕雲雀

夕雲雀そろそろ点る夕爾の灯
浮巢鳩居てもみなくとも小波
緑蔭や象退屈な鼻下げて
薫風やキリンの覗く玉子焼
園若葉サバンナを恋ふ駝鳥の瞳

秀華採集

花は葉に城垣の石男貌

亀井福恵

「人は石垣人は城」という歌詞を思い出している。しっかりと積まれている「石」を「男貌」とは大胆な表現だが、敵に真向かっている石垣を思えば楽しく納得している。

地獄絵の赤の濃淡花さつき

吉岡悦女

首のべてタンポポの絮唱ひ出す

澤近栄子

ともに表現に工夫がある。「地獄絵」にはあらゆる赤が組み合わせられているし、後句の「唱ひ出す」には準備の成った状態が述べられている。



神麓集

若葉風

藤岡紫水

晚鐘の余韻五月の空に消ゆ
門灯の点れば匂ふ夜の新樹
三鍬目でやつと筍浮きにけり
石佛は無想の姿若葉風
一花見ずただ万緑のあるがのみ

老鶯

松本鷹根

湖風に阜月を丸く咲かせ棲む
寂の墓碑蚊の泣き声と手を合はす
扇風機首振り孤独嗜める
葉隠れに覗く実梅や神籤結ふ
老鶯に峰は葉風の艶競ふ

松田都青

春愁の沁みし雑布しぼり切る
残像はあこがれに似る海道忌
寄り添ひてわが身の影に母子草
永き日や象の花嫁檻で行く
永き日の永き停車や山陰線

遠い記憶

北川孝子

暮春かな遠い記憶の遠い雲
一途なる来し方語りさくらしべ
遠き帆の走りはじめし春夕焼
吐きて吸ふ息やはらかに桜東風
自分史をひと括りして薬玉吊る

冥土

丸井巴水

子と犬の野遊び終へて息青し
五月鬱鸚鵡返しで暮れて行く
破れても金魚掬ひの型保ち
ポケットの小銭の重さ青き踏む
冥土への距離をちぢめて藤の花

夏つばめ

塩貝朱千

夫の目にわたしの涙明け易し
今朝落ちし沙羅の涙をてのひらに
夏つばめ最後の愛を囁けり
水無月やいのちある身に水を買ふ
夏萩や夢のはなしに妣がゐて



京鹿子集

豊田都峰選

花は葉に城垣の石男貌

福山 亀井 福恵

薫風や切れ味のよき河口堰

母の日の余韻をのこす夕茜
砂ずりの砂には遠し神の藤

遠足の列の伸び切る川ほとり

金婚の祝ひは野外花サボテン
アリソナ 伊吹 之博

どこまでも空鳥帰る一路あり

老紳士銀スプーンで氷菓食む

地獄絵の赤の濃淡花さつき

京都 吉岡 悦女

カーネーション四人姉妹の母傘寿
青芝や五感楽しむバーベキュー

賜りて筍づくしひとり占め

どんよりと眺めは灰色夏浅し
オハイオ 水谷 直子

子育ての燕をほめて喫茶店

黄水仙ひつそり一輪葉の中に

若夏の陽を余さずに物干せり

夏はまだ空はくもりにサボタージユ

首のべてタンポポの絮唱ひ出す

澤近 栄子

銀鱗を揺する立夏の鯉のぼり

オハイオやこ暫くは薄暑かな

芽柳のさつそく風とたはむれり

札 幌 野村 鞆枝

ただならぬ気配孕みて北の春

次なる手読まれてをりぬ子どもの日
強き瞳を放つ少年夏帽子

暮遅し身上話を聞くはめに

花五輪靖国はけふ開花せし

布川 孝子

四月馬鹿指先のみのお話増ゆ

牧みどり群羊率ひ犬二頭

春風に何か良事の有る気配

酒 田 藤波 松山

バンジージャンプ五月の風を切り裂きぬ
雷鳴も仲間に加へ笑ひヨガ

花時の露店の灯り雨に濡れ

一筆の墨に山吹き八重に咲く

松 戸 岡山 敦子

花吹雪川面に散りて流れけり

花ひとひら言霊を抱きつづき降る

花過ぎて普通の路に人の行く

花に雪記憶の中に母の居り

花散るか雨戸を叩く夜半の雨

さいたま 神田 惣介

沿線の桜満開通勤車

鯨の目の薫風放つ白鷺城

習志野 上野 紫泉

入園児母去り行けばべそをかく

松の芯即身仏のかげり持つ

選挙済み祈るは平和菜種梅雨

絶交と言ひたし墓のひとつ跳ぶ

亀は万年葦は一年角立ちぬ

千 葉 伊藤 希眸

老鶯の棲みついてをり福の耳

詠ふとは風になること花万朶

蟹缶をぱかんと開き夏に入る

節樽れの音なく白魚掬ひけり

まねく風さそふ雨あり夕桜

船 橋 元橋 孝之

花に雪魔性といふは美しく

絵手紙の水茎にほふ糸柳

喪の家の蝶の入り口あけておく

直江 裕子

桃咲いて儂きことをはかなくす

蝶ふはりと地球はけふもひとつ星

新緑のあはひに齢おそろしき

煎餅を前歯で齧る日永かな

金子 正道

たんぼぼは風になる日をまだ知らぬ

空襲の夜を知る川桜散る

調教のいななき近し聖五月

高野 春子

ふらここを大きく漕いで風を生む

献盃の窓一斉に若葉風

どちらかと言へばいい奴紫木蓮

高階のきらめき増やし花の宴

東京 野中 圭子

親と子の絆は強く八重桜

夏近し手を振り返し選挙カー

今日晴れて柿の若葉に光りあり

ゴーギヤンの問ひ遣り過ごす春の靄

剪定はまづねぎらひの声かけて

遅れじと通草の花も咲きにけり

花冷や整地のすすむ屋敷跡

白いつつじは父の好みよ潮じめり

若葉わかば高原の風さわぎだす

更衣生活の余白本を積む

大落暉金雀枝の花燃えつくす

飛び石を渡つたやうに落椿

四月馬鹿波打つ京の窓ガラス

沈丁や古民家カフェの赤ワイン

はにかみの子も半歩出るシヤボシ玉

芽吹き色庭に溢れど孤の時間

花開く心も開くバスツアー

裏木戸は踊り子草の花舞台

橘や鳥語盛んに立夏かな

訪れし里やくよなく滝桜
花の雨キリンは立ちしまま憩ひ

信玄の故事の武者行く桃の花

指先の記憶のかけらライラック

白木蓮鏑のひろがる午後三時

猿の背ナニつ並んで万愚節

きゅんと鳴る電車に揺られ花の昼

咲き咲きてちりちりちりり花筵

大八洲代田水より生まれけり

なぞらふは学びの一步ほうほけきよ

花嫁の一瞬止まる蝶の昼

川一本隔てて花の怒濤かな

春猛る白のきはみの姫路城

どこまでもさくらさくらの播州路

花街道行き着く先の播磨灘

靄消える播州盆地の山笑ふ

風五月昂るものなしとせす

鳩居堂の一筆箋に牡丹二句

返り来る筈は青しほととぎす

手児奈井の謂れるかに夏落葉

くり返す花いちもんめ日の永し

一片の舞ひの静けき落花かな

薄墨の桜ためいきそつと吐く
浮かれ出て伊達の薄着に花の冷

神田美千留

中島悠美子

児玉 有希

高島正比古

中西 明子

中村 三郎

福島 照子

河島 坦